

先輩からのメッセーヂ

僕は野球部で三年間活動し、心身共に成長できた日々大きな充実感を抱くことができました。

入部した頃は野球経験の少ない僕に、先生方や先輩方が野球の技術を丁寧に教えてくださいました。先輩のプレーを見て、

「僕も野球がうまくなりたい。」

と思い、しんどい基礎練習に前向きに取り組め、だんだん技術を身につけることができました。技術だけでなく準備や片付け、挨拶に至るまで、先輩の後ろ姿から学ぶこともたくさんありました。それらが人として当たり前のことだと教わりました。後輩たちとの出会いもありがたかったと思っています。後輩に伝える立場になったときには、

「技術以上に大切なことがある。」

と説明しながら、自分の中でも再確認することができました。そして、僕が部活動を通して、先輩、同級生、後輩、先生方、家族など多くの方から教わった一番大切なことは、「人を思いやる心」でした。

そのことを特に思い知った出来事が、春の大会で起きました。レギュラーに選ばれていた大会前日、練習中に足を捻挫してしまい、僕は試合に出られなくなり、代わりに後輩が出ることになりました。

「ここまで努力してきたのに、しんどい練習も乗り越えて、頑張っ

きたのに、なんでこんなことに…。」

という思いで、その日の夜は悔しくて悔しくて、ふとんに入ってからも涙が止まりませんでした。

「代わりに出られて、うれしいやろな。」

「もしかしたら、この試合で活躍したら、これからのレギュラーもとられてしまうかもしれん。」

「ミスしてくれへんかな。」

「僕が出ていない試合は、チームが負けて、やっぱり出てほしかったって、みんなが思ってくれたらな。」

今から考えれば本当に、自分のことばかり思っていました。それだけ出られなかったことが悔しかったのです。

試合が始まったでも、応援どころか落ち込んだままで、ぼんやり試合を眺めていました。

ところが試合は勝利したのです。みんなが喜び合いました。応援に来ていた人も、先生も、

「よう、がんばったな。」

「先制点入れられたのに、粘り勝ったな。」

と、みんなを讃えていました。試合の様子からも、チームの団結力と普段の練習の成果を発揮できたのが勝因でした。それなのに僕は、暗い表情でじっと立っていました。

「誰も僕の気持ちなんかわかってくれへん。」



そのとき、僕の代わりに出た後輩が目の前に走って来ました。

「いつか先輩みたいになりたいくて、練習でいつも先輩のプレーを見てました。今日は先輩の悔しい気持ちの分も頑張って、ヒットを打って、先輩にほめてもらおうと思ったけど、役に立てませんでした。情けないです。」

と、涙を浮かべて言ったのです。情けないのは僕の方です。返す言葉も見つからず、赤い顔をして下を向いてしまいました。その後、みんなも、

「夏は絶対一緒にがんばろな。」

「けが、はよ治していっぱい練習しよな。」

口々に声をかけてくれました。涙が出ました。

「練習、挨拶、準備、片付け、どれも心が入っていないとできないんだ。」「メンバーを思いやる心、周りへの感謝の気持ちをもっと大切にしよう。」そう思うようになってから、夏の大会までの毎日の練習は、本当に充実したものとなりました。

けがや病気で練習できない仲間には、自分から励ましはげの言葉をかけるように心がけました。ひたむきに練習していても技術の差でレギュラーになれず、それでも精一杯せい応援してくれる同級生や後輩たちに、「ありがとう」と心から言えました。練習試合で負けて部員みんなで悔し涙を流し、勝って喜びを共にし、いろんな場面で心から笑い合えました。もちろん、最後の夏の大会もチーム一丸となって、最高のプレーができました。

僕たちがこんな経験ができたのは、たくさんの方の支えがあったからです。家族や、部員の家族のみなさんにもたくさんサポートしてもらい、それは本当にありがたいことだったと感謝しています。

同級生だけではない活動と比べて、部活動は難しい部分がある反面、同級生だけでは経験できないような一体感や充実感、達成感を得ることができます。先輩たちの思いや考えを受け止め、それを後輩たちに伝えたいと思ったことや、後輩たちが自分たちを目標としてくれることがうれしかったり、逆に後輩たちから教えられたことなどを今思い出しています。だから、後輩たちに、今いる同級生や先輩、これから入部する後輩を大切に、そして、周りのすべての人への感謝を忘れずに部活動に励んでほしいと思います。

誰にも必ず「メンバーの中の自分の役割」と「自分の中で向上できること」があります。自分でそれを見つけ、また、お互いたがにそれを見つけ合えるような部活動をめざしてください。

後輩のみんなへ

「ありがとう。がんばれよ。
一人じゃないぞ。」

